説教20220116イザヤ49：1-7ヨハネ1：29-42「わたしは見た。」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

「百聞は一見に如かず」、この格言はもともと中国の古い文書である漢書の中に記されたもので、それが日本に伝わって、今でもよく使われています。つまり聖書とは遠く離れた東洋の地で、違う時間の流れのうちに培われた格言だと言えるでしょうが、それでも、今日の聖書箇所を黙想していく上で、大変役に立ちました。このことは、主なる神が、古今東西の全ての事物や思想を、生き支配されていることの一つの証しになるでしょう。

「百聞は一見に如かず」の意味は、一般的には、人から何度も聞くより、一度実際に自分の目で見るほうが確かであり、よくわかる。という風に解説されます。聞くということに対する見ることの優位性を説くわけです。皆さんもそのように理解されているのではないでしょうか。

では、100たす1の101は一見に如かず、でしょうか、屁理屈のように聞こえるかもしれませんが、101聞は論理的にはー見に勝っているのではないでしょうか。このように数を打てば、聞くということがいつしか一回だけ見るという体験に勝ってくるのではないでしょうか。このように考えますと、聞くという体験が見るという体験に比べて、劣っている、意味が薄い、という認識は、あまり当たっていないと思われてきます。

実際、ユダヤ人の間に育まれた格言には次のようなものがあります。それは「学ぶには、目よりも耳の方が役に立つ」という格言で、ここでは、見ることに対する聞くことの優位性が説かれているのです。これは日本でいう、耳学問という言葉に通じることのように思います。

聖書では、見るということ、そして聞くということ、そのどちらも大変重んじられ、貴重な体験として捉えられています。私たちは、決して「百聞は一見に如かず」ということで、聞くということを疎かにしてはいけないのです。そして、見ること、聞くことにはそれぞれ、特徴があるように思います。私たちは、物事を見極め、深く知り、最終的に自分のものとする過程において、その物事のことを聞いたり見たりすることでしょう。そうやってその物事について学びを深めていくわけです。

ここであらかじめ申し上げておきたいことは、見る、ということはただ目を使って見るということに留まらず、精神と魂を使って見るということを含みます。そして聞く、ということは離れている人からの手紙を見る、ですとか、今ではテレビ電話の類の通信手段もいろいろありますが、そういった形で見聞きすることも含まれます。つまり聞くということは、伝え聞く、伝聞するという意味であります。

もう少し、見ることと聞くことの特徴や違いを鮮明に解説しますと、見ることとは、一回限りのこの場所において、それと出会うこと、それを目撃すること、それの証人となることです。「私は見た」「私は見てしまった」という世界であります。他方、聞くこととは繰り返し何度も何度も、あきらめずに、色々な仕方で、そのことについて伝え聞くということです。それには長い時間がかかることもあり、また、その過程でいろいろと上塗りがなされ、深められていく中で、距離を縮め、それに接近を図っていくということです。

もう、お気付きのことと思いますが、私たちは、今、離れて見えないところに居られる、イエス様について、色々と聞いている、或いは話しているのです。そうして、ヨハネ福音書１章18節の「いまだかつて、神を見た者はいない」という御言葉は、今の時代を生きる私たちに当てはまる御言葉であります。私たちはイエス様をまだ、定められたその時まで、見ることは出来ないのです。

以上より、聞くことと、見ることは、両方とも疎かにできない、大変、重要なことであるという意味がよくお分かりになると思います。

さて、聞くこと、見ることは、この世の中においても、大変重要であります。今はコロナ渦という時代でありますので、私たちは、様々な事情により、親しい人に会えない、という事態に見舞われています。でも、聞くこと見ることの働きを十分に生かせば、この事態をも有意義に乗り越えていくことが出来るかも知れません。例えば２年に一回しか、顔と顔を合わせて会うことが出来ない状況であっても、会えない時間にあっては、聞くことを深めていく、聞くことを何度も何度も重ねていく、そして、会える時間が与えられたならば、その一回限りの、お互いを見る時間を楽しみ味わうということであります。例えば、息子ヨセフに長年会えないでいたヤコブは、このように言いました。「よかった。息子ヨセフがまだ生きていたとは。わたしは行こう。死ぬ前に、どうしても会いたい。」そうして、死ぬ間際に息子ヨセフとの再会を果たし「お前の顔さえ見ることができようとは思わなかったのに、なんと、神はお前の子供たちをも見させてくださった。」と、ヨセフを抱きしめて、言いました。これはヤコブが、息子に会えないでいる長い間も、彼のことを思い続け、彼のことを聞き続けた結果であります。

さて、今日の聖書箇所は、この見る、聞くという言葉に注意して読み進めればわかってくることが多くあります。最初に申し上げておかなければならないのは、ヨハネ福音書１章39節の訳のことです。ここでイエス様は実は人々に「来て、見て観なさい」と言われているのです。元のギリシャ語にはそのように書いてあります。ですから、是非皆さん、この「来なさい」という日本語は「来て、観なさい」という風に補足して読んで頂ければと思います。

さて、今日もまた、イエス様の上に聖霊がハトのように天から下ってとどまったことが記されています。先週のマタイ福音書の箇所の記述と同じですが、実は、今日の箇所には、見た、という言葉が３回も出てきます。

・ヨハネは証しした。「わたしは、“霊”が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た。わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を授けるためにわたしをお遣わしになった方が、『“霊”が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を授ける人である』とわたしに言われた。わたしはそれを見た。

この３回の見たという体験の主体は、洗礼者ヨハネであります。つまり、ヨハネはイエス様が聖霊を受けたという一回限りの場面の目撃者となったということが、この聖書箇所に強調されて記されているのです。

そしてその翌日、洗礼者ヨハネは、二人の弟子と一緒に３人で、イエス様のちょっと後ろを歩いていたのです。そしてヨハネは、前を行くイエス様を見つめて、「見よ、神の子羊だ」と言いました。このヨハネの発言は、前日の目撃体験に根差しています。そして、二人の弟子たちは、それを聞いて、と記されています。二人の弟子たちの方は、そのヨハネの言葉を聞くことによって、イエス様に従ったのでした。そしてイエス様は、３人の方を振り返って、彼らが従ってくるのを見て、「何を求めているのか」と言われたのでした。そして彼らが、「ラビ、どこに泊まっておられるのですか」と言うと、それに対しイエス様は「来て、見て観なさい、そうすればわかる」とお答えになりました。そして、彼らは、ついていって、どこにイエスが止まっておられるかを見た、とあります。ここでこの３人は、またイエス様が泊まっておられる場所、より聖書的な言葉に言いかえれば、とどまっている場所（これはわたしの愛に留まりなさいとイエス様が言われた時の留まると語句であります）、そのとどまっている場所を目撃したのであります。その見てしまったという画期的な場面は、午後４時頃のことであったと具体的に証言されています。

それから日付が変わりまして、二人のうちの一人、アンデレは、自分の兄弟シモンに会って、「わたしはメシアに出会った」と言います。そしてそれを聞いたシモンは、イエスのところに連れていかれて、シモンはイエス様と相まみえることとなりました。このシモンは、後に初めての教会の礎となったペトロのことであります。

私たちは、この聖書に記された成り行き、見ることと聞くことが、いわば相い合いながら進められていき、だんだんと、イエス様のことが知れ渡っていく成り行きに、この世の日常と違わない有様を見出すのではないでしょうか。ここには、何らイエス様がなさった信じられない奇跡の出来事が記されている訳ではありません。ただ、イエス様に３人がついていって、同じところに泊まったという、関心がなければ、読み飛ばしてしまうような出来事が記されているだけなのです。

でも、私たちは、ここに貴重な場面、重要な出来事の数々を見出すことになるでしょう。まず、イエス様が聖霊を受けられたということ、そしてそれをヨハネが目撃して、二人の弟子に話したこと、その結果、３人はイエス様のいうことを聞いて、イエス様の留まるところへと導かれ、そこに留まり、後の二人もイエス様を見たということ。そして後日、アンデレが話したことによって、ペトロにイエス様のことが聞かれ、ペトロも又、イエス様を見ることになったのでした。

この様に、見る、聞くということの働きが、時と所に応じて、充分に働いて、イエス様の良き知らせ、すなわち福音が人々の間に広まっていく初動の出来事が具体的に記されているのです。

さて、私たちもこの世の中で、２，３人と連れ立って歩き、そしてその少し前を、まだ言葉を交わしたこともない魅力的な先輩が一人歩いている、と言ったようなsituationにいろいろと出くわすのではないでしょうか。私たちは、そうして話をして、話を聞いて、そして見て、見られるということの積み重ねによって世界を構築していくでしょう。そういう意味では、この世のことと聖書のことはつながっているのです。イエス様は今は私たちには見えない程、遠くに居られますので、私たちはただ、イエス様の話をし、話を聞いているのであります。ただというと誤解されかねませんが、先ほどお話しましたように、その聞く時間というのも、また私たちにとって大変貴重な、積み重ねの時であります。そして、イエス様は遠くにいると申し上げましたが、全能で憐み深いイエス様にとっては、私たちは何時でも見つめていられる、すぐ近くにいるのです。だからイエス様はいつも私たち一人一人のことを見ておられるのです。私たちはイエス様が見ておられるという信仰を、イエス様のことを聞くことによって深めて参りましょう。また、私たちには見えないイエス様ですが、この教会で、洗礼や聖餐が行われる時、（うまく言葉にはできませんが、）私たちは、イエス様の姿のきらめきのようなことを目にすることでしょう。このような常にイエス様と歩む日々の恵みを、聞いて、見て、そして隣人に話しながら、私たちはこの地上の１歩１歩を進めて参りたい、と願います。

祈ります

天の父

あなたは、今日も又、十字架の下にわたしたちを導いて下さり、あなたの声を聞く者としてくださいました。どうか、私たちが心を鎮めて、あなたの声を聞いて、全てに勝るあなたの愛を信じるものとさせてください。

私たちはあなたの声を隣人に伝えることによって救われます。その喜ばしい技に私たちが、たゆまず関わっていくことが出来ますように、私たちを力づけ励ましてください。

今、死の影の谷を歩んでいる、私たちのうちには、苦しみ、悲しむ方々が多くいます。どうか、その方々に、私たちが心を尽くして知恵を尽くして、あなたの福音を告げ知らせていくことが出来ますように。

あなたと顔と顔を合わせて、見る日を待ち望みながら、私たちがあなたの憐みの霊に満たされて、福音に生きる者とならしめてください。